

【1】夏の午後

何年か前の夏、所用で四国へ行き、高松での仕事が済んで、高速バスで徳島へ出ることにしました。

うんざりするほど暑い午後3時過ぎ、乗客は少なかったのですが私の席の斜め前に席を取った小学三～四年生くらいの運動着姿の男の子が居ました。サッカーか何かのスポーツの試合帰りという雰囲気です。

発車してしばらくは窓に顔を寄せ、移り変わる風景に夢中で、少年時代の私自身を見るようでしたが、小一時間もすると急にソワソワし出し、車内を見わたしたり運転手の方を見やるなど落ち着きがなくなりました。

バスが鳴門のインターチェンジから高速道路を降り、最初の停留所へゆっくり近づくと、男の子の顔が急にパッと明るくなり、まだ停まらぬバスの車内を駆けぬけてドアが開くなり真っ先に降りて行きました。

歩道には父親と覚しき中年の男性が立っていて男の子はその腰に抱き着きました。

父親は“可愛い子には旅をさせよ”と男の子を一人で高松のスポーツイベントに参加させたのでしょう。

父子の乗った軽自動車はバスより先に走り去りましたが、徳島駅前まで残りの20分間の私の旅は心はずんでいました。

あの子は父親の期待を裏切らない立派な青年になるだろうと赤の他人の私にも予感させるものがあったし、何より今夜の宿の酒はうまいだろうというこれは本当の確信がありました。